紙メディアの未来

ジョン・タトゥーロがウディ・アレンを起用した「ジゴロ・イン・ニューヨーク」は土地性が微妙でおもしろかったね。

トチセイ？ ああ、ニューヨークですね。あれはマンハッタンでしょう。試写会でもらったプレスに詳しい地図が載っていました。

いや、マンハッタンもだけど、重要なのはむしろブルックリンだ。ウィリアムズバーグ・ブリッジのむこう側の正統派ユダヤ人が住むエリアですよ。場所がかわると最初に有名な帽子屋の看板見せるとか、ちゃんと合図はしている。

そういえば、なんで黒ずくめで髭をはやした男たちがぞろぞろ出てくるのかと思いました。でも、最初のシーンはマンハッタンの本屋ですね。アレンとタトゥーロが経営していたが、閉店になる。あれは、現存する Westsider という本屋のテントを差替えて撮影したんですってね。

アレンが演じるマレイ・シュウォルツだけど、かつてのイーディッシュ演劇の名優にモリス・シュウォルツというのがいて、それにひっかけているんじゃないかな。モリスは〝モリー〟とも言うんだ。この映画はそういう暗示だらけのところが面白い。

フィオラヴァンテを演じるタトゥーロは、ローマン・カソリックですが、ユダヤ人のコーエン兄弟とも親しいし、重要なユダヤ人の役をやってますね。「遥かなる帰郷」(97)ではアウシュヴィッツから生還するプリモ・レヴィの役、「クイズ・ショウ」(94)でも、テレビのクイズ番組の不正を摘発するハービー・シュテンペルという実在のユダヤ人を演じていた。

アレンが〝カネに汚いユダヤ人〟を演じるとか、性的冒険に飢えている金持ち女をシャロン・ストーンとソリア・ブルガラがいかにもに演じるとか、差別ギリギリの茶化しだらけなんだけど、ウィリアムズバーグの正統派ユダヤ人に関しては、けっこうまともにえがいている。ラビの未亡人のアヴィガル(ヴァネッサ・パラディ)がカツラを外すシーンがあるでしょう。戒律を守るユダヤの女性はいまでも他人には生の頭髪を見せないんだ。だから、彼女がフィオラヴァンテのマッサージで心のしこりがとれるシーンはなかなか説得力があり、感動的なわけ。

リーヴ・シュレイバーがユダヤ帽をかぶって警官をやっているのには笑いましたね。

いや、警官じゃないよ。ウィリアムズバーグのコミュニティが紛争を避けるために配備している自警員だ。

シュレイバーのすばらしい監督作「僕の大事なコレクション」(06)でナチ時代のウクライナのユダヤ人虐殺問題に注意をうながしたように、彼は、リベラルなユダヤ人。そういう彼が正統派を演じるところが可笑しいわけ。ウィリアムズバーグ地区にはマンハッタンで金(きん)取引の店を出しているひとが多いんだが、むかしは異民族との紛争がたえなくて、通勤には黄色の通学用みたいな独自のバスを使うようになった。だから、マレーが黒人の子供たちを連れてウィリアムズバーグに来るシーンで黒服のユダヤ人が怪訝な顔で見るけど、あれはいまでも普通なんです。

なるほど、そういうふうに見ると、アレンが黒幕というだけの映画じゃないですね。本屋がやってけなくなって売春業に転向なんてキツい風刺だ。

でも、書店にあるものが紙メディアのすべてではない。このページも、プリントアウトして読むと、全然印象がちがうだろう。そんなところが今後の紙メディアのカギかな。

Fading Gigolo/ 2013/John Turturro

tetsuo@cinemanote.jp http://cinemanote.jp